エッセイ

闘病記

SCE・Net 渋谷 徹

E-40
発行日
2012/8/29

私は、昨年11月25日から本年1月14日までの50日間入院する破目になった。11月25日（金）は穏やかな日和であり、12時より新横浜駅前のホテルで、45年前に入社して最初に配属された研究所のOB会があるので懐かしい方々に会って、美味しい食事・酒を楽しめると期待して、昼の空いている千葉発快速電車の座席に座り本を読んでいた。暗転したのは、錦糸町駅を出て直ぐであった。背中の腰の少し上が急に痛くなり、そして痛みは瞬く間に背中全体に広がった。全く原因は思い至らず、そのうち治まるであろうと気楽に考えて痛みに堪えながら横浜駅で下車した。しかし痛みは治まる様子は全く無かったので、幹事に電話で状況を説明し欠席を伝えた。折り返し電車に乗って品川から病院に行く事にした。その病院には家内が検診のため朝から行っていたので、携帯電話で状況を伝え、直ぐに診て貰えるように手配を頼んだ。品川からタクシーに乗って、何か判らない病人を仕分ける「連携診療科」に辿りついたのは12時少し前であった。（注：この病院は私も人間ドックその他で定期的に掛っており、私の健康に関する基本データを持っている。）

医者に病状を説明し、直ぐにレントゲン撮影・エコー・CT検査を受けることになり、それぞれの検査室へ「痛い・痛い」と呟きながら痛いのを我慢して巡り歩いた。｛痛いながらも考えた：「痛い」と思うから痛みは増すのではないか？「気持ちよい」と思えば痛みは和らぐのではないか？そこで、検査室の前で椅子に寄り掛り痛みに堪えながら「アー気持ち良い・アー気持ち良い」と呟いてみた。結果は期待に反したものであった。現実の痛みと呟く言葉がマッチせず、痛みは増すような感じであった。さらに、周りの人からの通報で精神科に回されるのを恐れ実験は中止した。｝検査を終えて「連携診療科」に戻って来たら直ぐに、看護師がストレッチャーを押して来てこれに乗って、安静にしろと言われた。家内に上着を渡し静かに横になった。連れて行かれた先は、循環器内科の集中治療室（CCU）であった。病名は「急性

大動脈解離：Stanford B,　DeBakey Ⅲb」。直ぐに点滴がなされ、そのまま感覚が薄れた。意識が正常に戻ったのは三日後であった。その間については、見舞いに来てくれた家族・親戚の人達の顔が記憶に残っているだけである。五日後病室に移り、初めての食事を口にした。{大動脈解離については、一例として；聖路加国際病院・心臓血管外科　渡辺　直(スナオ)氏のHP参照}

病室に移った直後はベッドから降りることも許されない、絶対安静状態であったが、二日後に歩行テストを行い、その後の血圧が低いままだったので病室内の歩行はゆるされた。その翌日点滴も全てなくなり、薬の服用での治療となった。元々血圧は130~140程度で、薬を服用するほどのレベルでは無かったが、120以下に維持するように薬の服用を始めた。個室に移ってすぐにPCを持ちこみ使用する事が許され、実社会との繋がりを感じることができて、大いに安心した。しかし、これが退屈な入院生活の始まりであった。1日3回の検温・血圧測定、3回の食事（血圧上昇防止のため塩分控えめの味気ない食事)、たまにCT検査（車イスに乗せられ、病院内移動)、という全く変化の無い生活であった。kill timeという英語の率直な表現を実感する日々となった。日常の気晴らしは、新聞・本を読むこと、TVを観ること、PCでのメール交換・インターネット情報等に限られてしまったが、なかでもメール交換は相手との繋がりが感じられ大いに気が休まった。PCの便利さを痛感した。それに、友人・知人の見舞いは大いに気がなごむ時間となり、最大の楽しみであった。このようにして、50日が過ぎた。

退院時の医者との面談で、「貴方のような血圧レベルでこの病気になる人は珍しい、しかも全く痕跡を残さないほど綺麗に血管が元に戻るのは奇跡的です。」と言われた。私本人は「狐に化かされた」ような心境であった。発症した時の痛さは今までにないものであり、二度と経験したくないものであったが、手術は勿論、血圧降下剤を服用する以外の治療らしい事は無く、只ひたすらベッドで静かに過ごしていただけであり、理解しがたい体験となった。今後の生活で注意すべき事を尋ねると、「今まで通りの生活で良いが、三ヶ月は外出を控え、一年間はスポーツも控えあまり無理をしないように」、「再発は交通事故に遭う確率程度と思い、心配しても始まらない」、「退院後の一

年間は三カ月毎の検診をしましょう」、「アルコールは血管を広げ、血圧を下げる効果があるから、この病気には飲み過ぎなければ悪いものでない」と言われて退院し、早くも七カ月が無事過ぎました。

あとがき；

「小人閑居して不善をなす」という諺があるが、私の実感は「小人閑居して何もなさず」であった。　このような拙文を読んで頂き、皆さんの時間を無駄に費やさせてしまったことが、最大の不善となってしまった。　陳謝。